

『地域人気一番の建設企業』を目指して

株式会社 技工団
代表取締役社長 作間 悦次



『技工団』という社名は、実は中国で付けられた名前のようなのです。『技』は技術者、『工』は中国の言葉で労働者を意味する工人、『団』は組織を意味しています。

創業者の作間正朝（女房の祖父になります）が南満州鉄道に鉄道建設技術者・管理者として奉じておりましたが、終戦。中国軍からの使役労働要求に対して『錦州日本人技術建設団』を組織し、軍からの飛行場建設、鉄道建設、建物建設、道路建設などに応じていました。言わばこれが技工団の芽生え。引き揚げ後、仙台、金沢、名古屋、大阪、山口、徳島、博多、松江にて地方団を立ち上げましたが、思いは遂げられず山口だけが存続したようです。現在は、土木工事・建築工事の設計・施工・維持管理、石灰石鉱山での採掘業務に従事しています。

私は元々建設業界でスタートしていないので余計にこう思うのかもしれませんが、この仕事はとて面白い仕事。今では珍しくやりがい、達成感のある、また人様に喜んでいただける、分かりやすい仕事だと思っています。

『愛され、信頼される建設企業でありたい。自然との調和を大切にしながら、確かな技術で地域の皆さんのお役に立ちたいいつも思っています。そして、地域の皆さんに必要とされる企業であることができるかどうか。いつもこれが私どものモノサシです』こういうメッセージを流させていただいています、本当にそう思っています。建設業という仕事は、産業活動や地域の生活者の皆さんのお手伝い役が使命だと思えるからです。

近年CSRレポートなどを多く目にするようになりました。

あんな風に社会に向けてきっちり事業活動を説明できるようになれるといいなと人ごとのように考えておりましたが、いろいろ拝見させていただくうちに、CSRって経営そのものでないかと思えるようになり、ちょっとやってみようかと、今、少し取り組んでいます。

CSRと言っても自己流です。『社会的責任』と言いますがどうしてもその語感から負のイメージが拭えないので、そう難しく捉えるのではなく、私たちの会社のありよう、事業活動などが、お客さま、お取引先、社員、地域社会などに、どう『役に立っているか』というところに立ち、会社・事業に纏わるあらゆるテーマに対して、網羅的に『あるべき姿』をCSRの基本的な考え方として取りまとめてみたいと作業を進めています。現状A地点から、あるべき姿B地点への旅ドラマ、それが経営そのもののような気がしております。B地点の整理という、この『我流のCSR』にしばらく時間を投じて参りたいと考えています。

『地域人気一番の建設企業』を目指すことを標榜し、今年度はそれを実現するために、『本業の実力強化』、『CSRの推進』、『健全な経営基盤の造成』を大きな目標に掲げて努めております。そして、取り組みが、自主自律を持続できるように、社内での良好な『コミュニケーション』をもとに、各自が、自分の仕事に責任と誇りを持ち、自主的に意見を『ボトムアップ』で提案し、組織の部分最適でなく、広い視野に立ち全体最適を目指して『チームワーク』を発揮して、未来を切り開いていきたいと考えています。